
赤い道化師の箱

miora

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い道化師の箱

【Nコード】

N2477Z

【作者名】

m i o r a

【あらすじ】

時は貴族が栄える時代。ロンドンから少し離れた田舎のミルフィではミシエル・カルセルの父、ルーカスが謎の死を遂げた。そしてミシエルの前で起きた悲劇。この二つの関係とは・・・？
父の死因とは？ミシエルの運命は？

人は誰でも、一つの仮面を持っている。それはまるで、表面とは裏腹に腹の中で嘲笑う道化師。

ステージへと最後に残るのは果たしてだれなのか？

そのステージを操っている道化師とは？

今、今世紀最大のサーカスが幕を開ける・・・。

: box 1 赤い道化師

: box 1 赤い道化師:

「ご主人様、此処にいたのですか」

穏やかな日差しが差しかかる、今日この頃。

木の上でのんびりと読書をしているミシエル・カルセールに向かつてセイン・ファルータは言った。ミシエルは金髪の短い髪をいじりながら、頷いた。

「うん。継承式の後片付け、御苦労さま」

此処はロンドンの都心から少し離れた、ミルフィという田舎。そして、ひと際大きい丘の上にある屋敷の亡き主、ルーカス・セルカール。今日は、ミシエルはルーカスが亡くなった為に少し、早い継承式を終えたのだった。

「いえ。それより、マロ様が怒っていましたよ。継承式の終わった後は皆様でパーティーだと言うのに、主がいらないとは何事だと」「パーティーか。ただ、親戚や貴族たちに挨拶するだけの退屈な催しさ。それだったら、僕は此処で静かに本を読んでいたよ」

「それに、その調子では主としての自覚が足りないとも仰っていましたよ」

ミシエルは思わず吹き出してしまった。あの怒りん棒で厳しいマローなら、言いそうだと。

(・・・主としての自覚、ね)

あまり実感が湧かない、というより、まだ父が亡くなった事が信じられない。

ちょうど自分の十四歳の誕生日だった、あの嘆かわしい報告が自分の耳に届くのは。

「・・・父はどうして、こんなにも早く逝ってしまったんだろうね」木からタン、と猫のように身軽に飛び降りた。

「・・・・・・・・・・」

セインは何も言えずにただ、ミシエルを見つめた。

「人生つて言うのは何が起こるか分からない」

不意に何かを思い起こしたようにセインに言った。

「父の死因はまだ、分からない？」

「はい。ミゴール警察署は未だ、調べてはいますが・・・・・・・・」

「どうなんだろうね。何だか父の死因はこの先、何をやっても分からないと思うよ」

「例の直感ですか？」

「ふふ。良く当たるんだ、僕の直感はね」

「知っていますよ。何年間、貴方のお傍に仕えていると思っているんですか？」

セインは乱れていたミシエルの髪を直しながら、笑った。

「・・・・ところで、良かったの？本当は僕の弟になる筈だったのに、使用人になんかになっちゃって」

「そんな滅相もない。貴方に救われて、どれだけ人生が変わったか。今でも感謝しきれないほどです」

「大げさだなあ、セインは」

はははと笑って、屋敷の窓から見えるパーティーの準備をしている使用人たちを見ていた。

そこにお目付役のマローが通りかかり、あっさりとミシエルは見つかつてしまった。

「まあ！此処にいらしたのですか、ミシエル様！さあさ、もう、伯爵や貴夫人達がお集まりになられてますよ。着替えてください」

「あーあ。見つかったちゃった。分かったよ、マロー。分かったから、そんなに怒鳴らないで」

やれやれと言う風に仕方なしにマローについて行く。その後をセインも付いてきた。

セインは昔からこうだった。少し、気が弱くて、周りになじめずにいた。

元々、孤児院にいたセインはそこでも、周りになじんでいる様子は無かった。そこで、父親に付いてきたミシエルは何度も、父に頼みこみ、何とか、この家の養子にしてみらうことになった。
(最初のうちは大変だったな……。なかなか、僕の事を信じてもらえなくて)

昔の事を思い起こすと、少し苦笑してしまう。

なかなか、良い物ではないのだから……。

その時、この後何か良くない事が起こると、不意に思った。

(あー……。こういう直感、良く当たるんだよね。何だろう。この胸騒ぎは。とにかく、あまりいい物じゃないな)

早くそんな事は忘れてしまおうと急いで、自分の部屋へと入った。部屋にはいると着替える物が既に、ベッドの上に置かれた。外を見ると、既に暗くなっており、空には星が瞬いていた。

「どうしました？先ほど、何か険しい顔をなさっていましたか」
着替えを持った、セインが言った

「あれ？そうなの？全然気付かなかった」

笑いながら、セインに「リボン、変じゃない？」と聞いた。セインは無言で、リボンを直した。恐らく、彼は気付いているのだろう。自分が何か嫌な事でも、思っていたのだと。

「そうだ。クラリスは来るのかな？」

「……。確か、レオン様と一緒にご出席なさると伺っております」

「レオン？ああ、クラリスの新しい使用人か……。でも、嫌だな。クラリスはどうも好きになれない」

「出来ましたよ」

苦笑いをしたセインが最後に髪を整えた。

「さて、行くか」

ミシエルはパーティーへと足を進めた。

「ミシエル様、この度は誠におめでとございます」

「こちらこそ、来てくださって有り難うございます」

手を握り、世間話に花を咲かす。これが社交界での常識。何とも、つまらなくて、くだらない催しだと、つくづく思う。

「こちらはバーキット夫人。代々伝わる、ニコル家の五代目でおられます」

紹介されたバーキット夫人は少し、歳を召された方だった。しかし、彼女は実に優雅に、そして穏やかな口調で挨拶をしてきた。

「こんばんは。随分と可愛らしい主人でなさるのね。私はバーキット・ニコル。愛称はバークと呼んでくださいな」

「僕はミシエル・セルカールと言います。気軽にミシエルと呼んで頂いて結構です、バーク夫人」

「では、ミシエルと呼ばせてもらうわ。・・・お父様の事、本当に残念に思うわ。非常に寛大なお方だったのに」

「父の事をそんな風に思ってください、有り難うございます」

「ふふ。礼儀正しいのね。あら？貴方は？」

セインは自分の方に視線を向けられて、とても戸惑っていた。

「ぼ、僕はセイン・ファルータです。ミシエル様の専属使用者でございます」

慌ててお辞儀をして、テーブルの角に頭をぶつけた。

「ふふふ。楽しい方ね。あら、もうこんな時間。ごめんなさいね。

折角来たのだけれど、孫の誕生日があるの。また今度、ミルクティーでも飲んで、ゆっくりお話をしましょう」

「はい、ぜひ」

「ああ。それともう一つ」

「はい？」

バーク夫人は耳に顔を寄せて、小さな声で言った。

「社交パーティーっていうのは退屈ね。そう思わない？」

「っこりと笑った。ミシエルもつられて、にこりと笑う。

「そうですね。その通りです」

バーク夫人は頷いて、使用人らしき人物と、一緒に広間を出て行った。

その時、セインはミシエルの方をポン、と叩いて指をさした。

「人に指を指すのは失礼じゃないのかい？」

パーマのかかった水色の髪の毛の男がにやにやとこちらへやってきた。

隣には茶髪の髪を後ろでゆるく束ねた美顔の男があくびをしながら、言った。

「やあ……。相変わらず、退屈なパーティーだね」

気だるそうにミシエルに向かって、呟き周りをぐるりと見渡した。

「ウェイクス侯爵にロレイル夫人……。さっき話していたのはバ
ーキット夫人？」

首を傾げながら、聞いてきた。

「よく来てくれましたね、クラリス様。てつきり、こんな所には来
ないかと思いましたよ」

「けっ！クラリスはお前の為にわざわざ、来てやったんだ。ありが
たく思え！」

「……。とやけに、五月蠅い雄犬が一匹いますが、その方がレオン
様？」

「んだと！誰が犬だっ！！それに男じゃない！女だ！」

セインとミシエルは顔を合わせ、もう一度レオンを見た。見た目は
普通の男の子だ。着ている服装もスカートではなく、ズボンを着て
いる。

「な、なんだよ。じろじろ見て」

「あの、女の子ですか？」

セインはやつとの思いで口を開いた。レオンは怒って、怒鳴ろうと
したがそれはクラリスの手によって遮られた。

「僕の新しい使用人だよ。普通にレオンって呼んで」

「はあ……」

「それより、良いの？もうすぐ君の演説だよ？」

指さしたその先にはマローが険しい顔でこちらに手招きをしていた。

「まずい！忘れてた！！」

急ぎ足で、ミシエルとセインはマローの方へと向かって行った。

「……あの人たちは、もう来てる？」

クラリスは前髪を掻きわけながら、レオンに聞いた。レオンはクラリスにくっ付き、にやにやと嗤いながらそれに答えた。

「うん もう、準備は整ったってさ」

クラリスはそれに少しだけ微笑むとゆっくりとレオンの頭を撫でた。レオンは嬉しそうにさらにギュツとクラリスにくっつく。クラリスは頭を撫でながら、演説をしているミシエルを見つめながら呟いた。「ああ……。道化師ヒエロの血塗られた演劇サーカスが幕を開ける」

（くそ、早く終わらないかな。マローの話っていつも、長いんだよな）

熱心に挨拶をしているマローの横でそんな事を思っていた。ちらっと隣をみるとすでにセインは硬直していた。

（まあ、無理も無いか。こんな大勢の人の前で立つのは初めてだもんね）

でも、面白いな、と思いつつ、セインの顔見ていた。その時だった。

「きゃああああああああつ」

女の人の叫び声が耳を貫いた。

（何が起こったんだ！？）

セインも状況がつかめなていない様子で、じっとそこを見つめた。すると、

「さあさ、血塗られたサーカスの始まりだ」

赤い服を着込んだ五名の人が斧やら、剣やらを振りまわしていた。顔は仮面をしていて分からない。逃げまどう人たち。残酷に切られていく人たち。

それぞれがまるで、踊り狂うサーカスの観客達の様にも何もかもが動いていた。

ミシエルはただ、立ちすくむだけだった。目の前で繰り広げられている光景は、赤い人たちはまるで……。

まるで、赤い道化師ピエロのようだ

その時、遠くでセインの叫び声が聞こえた。しかし、ミシエルにはそれは聞こえなかった。

腹に痛みを感じ、目の前が真っ暗になった。何も見えなくなった。

・・・遠くでセインが叫んでいるのが微かに聞こえた。

「ミシエル様ああああああああああああああああああああ」

：box2 サーカスの幕開け：（前書き）

パーティーで起こった事件。

とうとう、幕を開けたサーカス。

ミシエルの決意。赤い服装達の目的。

登場人物は整った。

台本がないこのサーカスはゆっくりと終わりに向かって進む。
それぞれの運命の歯車が今、廻り出す。

: box 2 サーカスの幕開け :

真っ暗で何も見えない場所。

遠のく意識の中で、セインの声が聞こえた。

『ミシエル様あああああああああああああああああああ』

(僕は死んでしまったのか)

ふっと笑って、前を横を向いた。

真っ暗の闇の中で誰かがいた。背を向け、髪の色も背丈もミシエルとそっくりだった。

手を差し伸べ、そいつの肩をつかんだ。ゆっくりと、そいつは振り向いた。

僕だ。

そいつはミシエルだった。ミシエルは何も言えず、ただ立ちすくんだ。

「僕は君だ。真実の君。そして、僕は君の………」

その時、ガラガラと空間が崩れ始めた。

崩れてゆくその中でそいつは近付きこっぴつた。そして、顔をぐつと、近づけた。

「道化師だ」

その顔には道化師ピエロの仮面。にやりと口角は上がり、目は妖しい形に歪んでいる。

「君のその顔は本当に君のもの？表の顔はピエロのように笑って、裏の顔は何が隠されているの？」

ケタケタと仮面の中で奴は嗤う。ミシエルは訳が分からなくなつて、一歩後ずさつた。

「何を言つて………」

ガツと顎を掴んで、そいつは最後に言つた。

「お前は………たんだろっ」

全てが崩れて行き、そいつが言つた言葉は聞こえなかった。

視界が真っ白になって何も見えなくなつた。

「ミシエル様!!!!」

ふつと眼を開けると、そこには見慣れた顔、セインの顔があつた。

「セ・・・イン?」

セインは目に涙を浮かべただ、「はい」と繰り返し答えた。

「ご無事でよかったです。もう、死んでしまったのかと・・・」

ベッドのそばで、椅子に座っていたセインは鼻をかんだ。その傍の棚の上には包帯や薬、体をふくための水とタオルが置いてあり、さらには林檎が一つとナイフが置いてあつた。

「ずっと僕の世話をしてくれたんだ。ありがとう。大変だったよね」
頭を撫でて、何とか涙を止めようとした。セインは首を振って笑顔を見せた。

「いいえ。助かってほしいとただ必死で。疲れは感じません・・・」
途中で言つて俯いてしまった。気になつて覗き込むとスヤスヤと寝息を立てて寝ていた。

ぷつと思わず笑つてしまった。

（ありがとう、セイン）

ミシエルは眠っているセインの頭を撫でた。その時、あいつが最後に言つた言葉が思い出された。

（何が言いたかつたのだろう）

ミシエルはふと、パーティーで起こつた事件と父の死因は何か関係があるように思えた。

（あの事件を追つていけば、父の死の真相が分かるかもしれない）
パーティーで赤い服たちが言つていた言葉。

「血塗られたサーカスの始まりだ」

血塗られたサーカス。この言葉の意味とは?ミシエルは顔を手で覆い、上を向いた。

「くくくく・・・」

ミシエルは小さな声で嗤つた。

ピカッ、ゴロゴロ……。

遠くで雷が鳴り、雨がぼつぼつと降ってきた。

(面白い。この事件の真相も知りたくなってきた)

そして、ナイフを持ち、それを柵に突き立てた。

僕があいつ等の血で、このサーカスを真っ赤に染め上げてやる！

！

幕が上がったなら、それを早く終わりに近づけてしまおう。

……誰もが見たくない物語が始まるのなら……。

コツコツと教会の中に足音が響く。主祭壇へと足を進める一つの影。主祭壇の周りには五人の男女がいた。影は仮面をつけ、赤い服を着ている。

ゴロゴロゴロ……。

雷はまだ、鳴っている。

「パーティーでのミシエルの誘拐計画、失敗に終わったわね」

影は言った。雷に照らされた、一人の女は言った。

「そういうあんたは、何もしなかったじゃない」

長いストレートの髪の毛の女、リリアン・ピレットはぎろりと睨んで、女の仮面を外した。

「そうでしょう？マロー・ゴルバット」

影はにやりと笑って、指を鳴らした。足元から黒い影がマローを包んだ。

「ミシエルのお目付役って本当、大変」

黒い影がバツと広がり、消えるとそこには若い女が立っていた。

「ごうんな、不細工な顔でしかも、オバサンに化けるって私には死より、苦だわ」

「けけけ。バーカ。僕はずっと若いからさ。全然、苦じゃないよ」

「ライアンは可愛いまんまだよ。僕はカッコいいよ」

シヨートヘアーの双子は言った。二人とも左右対称に、刻印が焼き付けられている。

「五月蠅いわよ、ライアン&セリアン・マルテロナ姉弟」

「そうだよ。カッコいいのはクウエイスだもん」

ぷくつと頬を膨らませ、子供っぽい口調で反抗しているのは、エミリー・ホンデス。クウエイスにぴったりとくつついて、頬をスリスリと腕にすりよせた。

「だってさ。良かつたわね、グリーンシナー緑の罪人」

マローはクウエイスへと視線を向け、オルゴールの椅子に座った。クウエイスと呼ばれた男は無言で、エミリーの頭を撫でた。髪が透き通るような緑色が目立つ。

マローはふん、と鼻を鳴らし、思い起こしたようにリリアンに問う。

「そう言えば、レイチエル様の五大遺品の一つ、『ピエロの人形』はあなたが持つてるのよね？」

髪を弄りながら、足を組み笑った。リリアンは不機嫌そうにマローを睨んだ。

「それが何だって言うの？」

「あなたはレイチエル様に、偉く信用されているようだからね。私にも何かご褒美が欲しいなあ。例えば、美しく輝くダイヤ、とかね」にやにやと笑う、マローをよそにリリアンは懐からピエロの人形を取り出し、見つめた。

「それはレイチェ・・・レイチエル様のご復活なさってからの話よ」

ドカーン！！！！ゴロゴロゴロ・・・。

雷が近づいているのか、ひと際大きい音を鳴らし、リリアンを照らした。

リリアンの目は血で染めたように真っ赤だ。リリアンは立ちあがり、五人をそれぞれ見渡し、仮面を付けた。

「さあ！我ら、赤の道化師トール・ロがレイチエル様をご復活させ、この世界を、サーカスをレイチエル様のお望み通りに真っ赤に染め上げようではないか！！」

両手を広げ、ケタケタと嗤った。

「今こそ、あの時の・・・千年前の恨みを晴らす時！レイチエル様を殺したあの忌まわしき人間どもに復讐を！！！！！」
教会には黒い影が、六つ。そして、六つの影は黒い影に覆われ、姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2477z/>

赤い道化師の箱

2011年12月11日09時49分発行